

JASCT

ニューズレター

第12巻第1号

平成5年(1993年)3月

発行人: 松本清一 印刷所: 絢文社

第22回 性治療研修会

日時 平成5年4月18日(日) A.M. 9:30 ~ P.M. 5:00
会場 日本赤十字看護大学講堂(東京・渋谷)
詳細はすでに郵送致しましたプログラムを御覧下さい。

第13回 日本性科学学会予告

日時 平成5年9月19日(日曜日) 場所 神戸市医師会館大ホール

プログラム

9:00 ~ 9:15	開会の辞	JASCT会長	松本清一
9:15 ~ 11:30	シンポジウム 「学校性教育」		
	1. 「小学校における性教育と心の発達」	神戸市立小部小学校教諭	山口隆幸
	2. 「中学校の性教育の取り組みについて」	神戸市立広陵中学校教諭	坂本建彦
	3. 「学校保健活動をととして思春期の“性”と“生”の支援」	神戸市立赤塚山高校教諭	内藤美朝子
	4. 「学校性教育に対する産婦人科医の関与」	福岡県幾嶋医院院長	幾嶋栄三郎
		西宮市山内産婦人科医院院長	山内敏弘
	追加発言者:	前産業医科大学産婦人科学教室教授	岡村靖
11:30 ~ 12:00	学会長講演 「当院における未完成婚」	山崎産科婦人科医院理事長	山崎高明
12:00 ~ 13:00	休憩・昼食	理事会	
13:00 ~ 13:05	兵庫県産婦人科学会会長挨拶		
13:05 ~ 14:30	一般演題		
14:30 ~ 15:00	教育講演Ⅰ 「学校におけるエイズ教育の課題と教育技術」	千葉大学教育学部教授	武田敏
15:00 ~ 15:10	休憩		
15:10 ~ 15:40	教育講演Ⅱ 「10代妊娠の問題点と対策」	大阪府立母子保健総合医療センター	竹村喬
15:40 ~ 16:10	教育講演Ⅲ 「新婚インポテンス」	三聖病院院長	斉藤宗吾
16:10 ~ 16:55	特別講演 「女性の発毛形態と内分泌環境」	滋賀医科大学産婦人科学教室助教授	笠井寛司
16:55 ~ 17:00	閉会の辞	第13回日本性科学学会会長	山崎高明

学会事務局 山崎産科婦人科医院 兵庫県神戸市東灘区住吉東町2-4-38 TEL 078-851-6490

Vol 12

No.
1

JASCT 事務局

〒107 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

幸せになることへの恐怖

神尾記念病院 堀 一子
JASCTS カウンセリング室

性の問題の治療に、初回から親がいっしょに来室することはめったにありません。もしそういう来方をした場合は、そのこと自体に重要な意味があると思います。

その日も、そんなことを考えながらD子さん母子を迎えていました。やはりお母さんから話し出されました。沈痛な、しかも怒りを抑えきれない様子でした。Dさんは3ヶ月前に結婚式を挙げましたが、Dさんが性行為を拒否し続け、いまだ夫妻は未完性婚のままでした。お母さんは、お婿さんに申し訳なく、親としてどう申し開きをしていいかわからない。先方は大変怒っているのに離婚になると思うが、今後のこともあるので、是非治るものなら治して欲しいとおっしゃるのです。でもDさんは「治るとはとても思えない」と、小さな身体をよけい小さくしていきます。

Dさんはお見合いをしたD氏に好感をもち28才で結婚しました。新婚初夜が、Dさんの初めての性体験でした。D氏は何の疑問も持たず彼女の身体にふれようとしていました。その時、Dさんにとっても思いもかけないことが起きたのです。頭の中では一生懸命応じようと思うのですが、自分の中からなんともたえようのない恐怖心がわいてきて、身体が硬直し、ガタガタ震え、全身で彼をはねのけていました。

Dさんは、性的なことをきらっていたわけではありません。むしろ友人の話や映画などにふれるにつけ自分も一度は経験してみたいと憧れてもいました。D氏と付き合っていたときも彼との性生活を想像することは、いやなことではありませんでした。ところが、現実を迎えた性生活は、何度試みてもこのように惨憺たるものでした。

性生活がこじれれば、日常生活にも影響が出、2人は、喧嘩をすることが多くなりました。DさんのD氏への印象はだんだん悪くなり、治療に訪れる少し前から、彼女は実家に帰ったままになっていました。間もなく2人は離婚しました。

さて、娘の結婚の失敗に対するお母さんの反応は、生半可なものではありませんでした。娘が出戻っているのを人に知られたくないからと、「人目につく時間に家への出入りをするな」「人に見られるから洗濯ものを干すな」「このまま家にいられては、弟の縁談にさしさわる」そして離婚が決まったとたん、一刻も早くアパートと仕事を捜して出ていくようDさんを責めたてます。

Dさんは言われるままに、アルバイトを見つけ、不動産屋をまわり、こそこそ人目を避けていますが、何か釈然としません。見かねたお父さんが「そこまで性急に言わなくても」といったところ、お母さんは、烈火のごとく怒り「Dが出て行かないなら私が出ていく」と言うのです。そういえばDさんが小さい頃からお母さんは怒るとよく「お母さん出ていっちゃう」と言って、本当にいなくなりました。実際は、近くのデパートで買い物をして憂さを晴らしていたのですが、そんなこととは幼いDさんは知るよしもありません。自分がそそうをするたびに、母親がいなくなる体験は、随分心細いものでした。

彼女とお母さんの関係がだんだん明らかになってきました。子どもの頃から、お母さんはなにかにつけDさんを近所の子と比較し、成績の悪さ、気の利かなさ等挙げつらいました。おしゃれに興味が出る年頃になって、自分で洋服を選んできると、センスの悪さ、経済観念のなさをなじられます。Dさんがピンクや赤の服を欲しがると「あんたは色が黒いから、そんなのは似合わないわよ」と、紺やブルーになってしまいます。でも、中学に入るまで枕元に母親が用意した服を、朝何の疑問もなく着ていたDさんには自分の好みを主張する力がありません。結局は母親の決めた服を着ていた方が安心だったのです。会社勤めをする頃にはDさんはすっかり自信の無い人になり、ふとした仕事のミスにも落ち込みました。そういう時お母さんは「私はちょっとバカで、他の人と同じように覚えられないんです」と平身低頭謝りなさいとアドバイス(?)するのです。お母さんはまるでDさんを人生の敗北者に仕立て上げようとしているかのようでした。

一般に、幼児期に<意味のある大人(母親)>から成功*に対して否定的な情緒反応を繰り返し受け続けると、人は成功や快楽や親密性に対して、非合理的で自己破壊的な恐怖心を持つようになると言われていています。彼らにとって、成功は母親(の愛)を失うことになるからです。このようなわけで、DさんはD氏と愛情関係がうまくいくという状況に言いしれぬ恐怖心を覚えたのです。

Dさんの母親が何故自分の娘にこのように接しなければならなかったのは、Dさんとお父さんの面接から推測するしかありません。なにしろお母さんはDさんが余計なことをしゃべらないか、見張るために、初回についてきただけです。察するところ、お母さんは幼いときから何かに激しく怒り続けている人のようでした。そしてお母さん自身まで成功を手にいれたことがなく、その自己を同性のDさんに投影してきたのでしょう。Dさんの治療目標は、人生に於ける成功者になることでした。アパートでの一人暮らしは、その一歩のはずでした。ところが、ある日Dさんはほっとした表情でやって来て、かねてからの予定通り、家族が1年後郊外に転居することになり彼女はまた家族と一緒に住むことになった旨を話しました。

Dさんは、またお母さんの傘下に入り、人生の敗者となっていました。お母さんにも、敗者としての自分を投影し続けるため、結婚に失敗したDさんが必要だったのです。

Dさんとお母さんは、Dさんの結婚を機にも、離婚を機にも、今までの不健康な関係を断ち切ることができませんでした。

ある手紙から

足利クリニック 足利 恭一

『・・・手紙ではどの程度意図するところが伝えられるかは分かりませんが、私が常日頃から考えている、男女の性感覚の違いについて述べてみたいと思います。先生は、北村先生の対談で「ですから、男性も受動的になれば、性器以外の感覚をもう少し楽しめるのでは。女性は主体的になりにくいけれど、逆に、感じるということでは感じるだけの主体になれますから、感覚そのものは深いというか」と言われていました。これこそ、男性一般が残念ながら実行できない、ないしは、感じるができない一番困難なことではないでしょうか。多分、先生は女性として、このような主張はごく当たり前のことと感じておられるでしょうが、男にとって受動的になることは、全く不可能ともいえる事ではないでしょうか。大多数の男性にとってセックスとは、ペニスを陰に挿入して射精するものという把握しかないので。

もう一つ、性器以外の感覚を楽しむと言っておられますが、性器以外の感覚は極端に言えば男性はゼロではないでしょうか。従って、男性のセックスは射精めきにしてはありえない。女性は手を握るだけで、その瞬間性的快感を得る事ができるよう。男性はその瞬間、快感を感じる事は無いのです。好きな女性と手を握る事ができたという、精神的な満足感を快感というならば、それはそれとして快感はあるといえるかもしれませんが、女性のように体自身に感じる心地よい感じ、男性からすれば性的快感と表現したくなるものは男性は感じられないのです。

私が今非常に興味を持っている男女の性感覚の相違は次の点です。すなわち、女性は好きな人が近くに寄ってきても、一種の性的快感を体を感じるようです。もちろん手を握ったり、抱き合ったらそれもまた体に快感として感じることでしょ。ところが、男性は手を握ったり、抱いたりする行為の中には、身体的な快感はまずありません。セックスによる射精によってのみ性的快感をえられるのです。さらに、女性は皮膚に触れる事により、快感が体の中を伝わって行くといいます。とくに、私が関心のあるのは、この快感が下腹部に伝達されるということです。手を握っている場合、触れた接触面が気持ち良いのではなく、それが伝わり、ある時は胸に、あるときは下腹部に快感がつたわってゆくものと表現しています。この事実は男性にはありません。毎年のように、大学の同窓会で男性（医師）に聞いていますが、その質問自身を非常に奇異にとっているようです。それは男には感覚が伝わるという体験が皆無であることの証明にもなります。しかし、女性の医師に聞くと、素直にその性的快感の事実を教えてくださいます。

要するに、男性は男性を感じる体験ないしは感覚を通じてしか女性を判断していない。また、女性も女性が感じるように男性が感じていると思いつつ判断しているのが現状ではないでしょうか。この点について、一般的な男女の性的感覚がどんなものであるのか、まずはっきりと話し合い、その相違についてそれなりの理解をした上で性の機能異常を語るべきではないでしょうか。その意味で、JASCTの研修会に4回出席しましたが、その点について取り上げた先生が誰もおられなかった事に対して非常に不満でした。

北村先生との対談で、先生は接触欲についてちょっとふれておられましたが、男性に接触欲がないのは、それを感じるだけの感覚が発達していない、ないしは退化しているものと私は考えております。女性が好きな男性に寄りかかるだけで気持ち良い（身体に性的快感を感じる）ということは、男性には経験できません。

男女の感覚がいかに異なるかと言う事を知ったきっかけについて、一言述べておきます。7、8年前と思いますが、根岸悦子さん（Woman's Body その他の翻訳者）がおもしろい体操があるから行かないか、という誘いで、野口体操を始めました。この体操はご存知かどうか分かりませんが、野口三千三先生が始められた体操で、基本は体をほぐすことを目的とした体操で、ラジオ体操の対極にあるものです。すべての力を抜いて、重力に体をまかせ、その中で体を動かすものです。従って、緊張を抜いた所により自然な体のあり方をみつけようとするものです。これをやって半年したところ、これまでに無かった心地よい感覚を体を感じるようになりました。緊張が感覚を麻痺させ、緊張をとることにより感じ易い体にするのではないかと、思いつつ数年続けてきました。このような気持ち良い感覚が野口体操をやっている全部の人が感じているかを個別に聞いてみましたところ、男性についていえば、年期を積んだごく少数の人はその気持ち良さを体験していました。これに対して、20才前後から70才位までの女性に同じ質問をしましたところ、いかに女性が感じ易いと言う事を知るに至りました。彼女らの返答は感じないのがむしろ鈍感で、感じるのが当然であるとの返答でした。ここから、男女の性感覚の相違に関する関心が生まれ、それがセックスとの関連で非常に興味ある事実がだんだんに分かってきました。・・・』

学会誌原稿募集

日本性科学会雑誌 1993年 VOL.11 No.1の原稿を、会員の先生から募集致します。

400字詰原稿用紙 15枚以内

投稿締切 平成5年5月末日

送り先 〒107 港区南青山1-1-1 新青山ビル 西館3F 長谷クリニック内 JASCT事務局

JASCT 第14期 会計報告

(平成3年10月1日～平成4年9月30日)

JASCT会長 松本 清一 ㊟

JASCT監事 飯沼 守夫 ㊟

新入会員

お手数ですが、お手持の名簿にご加筆ください。